

北海道におけるタンチョウの現状 ～生態と保護の歴史～



吉野 智生 (よしの ともお)

釧路市生涯学習部動物園管理係 学芸専門員

1979年生まれ、千葉県出身。大学時代から野鳥含む自然観察にのめり込み、獣医学部で合法的に野鳥を研究対象とするため寄生虫学を専攻。2009年酪農学園大学獣医学博士。2011年から環境省九州地方環境事務所勤務を経て、2013年より釧路市に奉職。2022年より現職。タンチョウの飼育、研究、標本作製および教育普及を主な業務とし、現在は主に阿寒国際ツルセンター勤務。

はじめに

ツル、と一口に言うと、特に道民がまず思い浮かべるのがタンチョウであろうと思います。頭が赤く、白と黒のコントラストが美しい鳥です（写真1）。ツルの仲間は世界で15種類いますが、日本で継続して繁殖し、一年中生息しているのはタンチョウだけです。また厳しい冬の間、保護のために給餌を行っていますので、給餌場に集まってくるタンチョウは、道東での観光資源としても知られています。筆者の勤務する阿寒国際ツルセンターには、隣接して給餌場があるので、冬には多くのタンチョウが飛来します。

一方で夏の間はこの光景は見られず、近くで縄張りを構えているペアか、流れ者の若い個体が時々訪れるくらいです。そのため給餌期間以外は飼育個体や館内の展示、映像資料をご覧くださいことになります。



写真1 冬の給餌場にて

タンチョウは大型で、意外と人間の近くでも生活しているのですが、その一方で地元民にとっては当たり前の存在になってしまっているのか、名前や姿以外は案外知られていないことも多くあります。様々な保護活動の結果、生息数も増えてきましたが、それに伴って課題も多くあります。今回はそんなタンチョウについて、紹介していきましょう。

タンチョウとは

まずは少し堅苦しい話から入ります。タンチョウは分類学的にはツル目ツル科に属し、主に湿地に住む大型の水鳥です。漢字では丹頂と書き、「丹」は「赤」、「頂」は「頭頂」を指します。アイヌ語ではサロルン・カムイ「湿地の神」と呼ばれます。英名は、現在では「Red-crowned Crane」すなわち「赤い頭冠のツル」が主流ですが過去には「Japanese Crane（日本のツル）」や「Manchurian Crane（満州のツル）」などとも呼ばれました。学名では「*Grus japonensis*」、「*Grus*」はツル属、「*japonensis*」は日本のという意味なので、日本のツルとして世界にも知られているわけです。もっとも、タンチョウは日本だけではなく、ロシア南部、朝鮮半島や中国南部などユーラシア大陸にも分布しています¹⁾。

タンチョウといえば頭の赤色が特徴的ですが、これは頭頂部の皮膚が裸出していて、あえてかかる言い方



写真2 成鳥（やや興奮している）



写真3 幼鳥（生後6か月程度）



写真4 亜成鳥（1歳半程度）

をすれば禿^はげています。これをいわゆるつるっばげと言うとか言わないとか。それはさておき、赤く見えるのは鶏のトサカのように、皮下の血液の色が透けて見えるため、興奮すると血管が拡張し、血流が増えるので赤い部分が後頭部まで拡大します（写真2）。ではいつからこうなるのかというと、幼鳥のうちは頭頂部にもきちんと茶色の羽が生えています（写真3）。これが1歳を超えた頃からだんだん抜け落ち（写真4）、タンチョウは3歳で成鳥、つまり性成熟し繁殖できるようになりますが、3歳までに完全に禿げます。タンチョウにとっては大人の証なのです。

ともあれその名前のとおり、主に湿地に住み、頭が赤い。名は体を表すといいますが、当たっているのではないのでしょうか。もっとも、最近は湿地の鳥というばかりでもないのですが、それは後ほど。

タンチョウの保護の始まり

タンチョウは過去には本州にも分布していましたが、狩猟による個体数減少や、開発に伴う生息地の減少などにより、明治時代に一度絶滅したと考えられていました¹⁾。そんなタンチョウが数十羽、釧路湿原の奥地で再発見されたのが1924年で、現在はそこから約100年が経過しました（表1）。再発見以降、地元住民や行政などにより様々な保護活動が行われるとともに、国の特別天然記念物に指定され、また種の保存法に基づく国内希少野生動植物種にも指定されました。

IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストではVU（危急種）、日本の環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）とされています。

野生動物の絶滅を防ぐためには、大きく分けて、本来の生息地での個体の増殖や生息環境の改善を図る「生息域内保全」と飼育下繁殖個体の増殖、再導入によって野生個体群を補強する「生息域外保全」の2つの考え方があります。動物園など飼育施設では主に後者が行われており、釧路市は国の保護増殖事業計画²⁾に基づき、環境省から保護増殖事業者の確認を受けてタンチョウの飼育、繁殖や保護に取り組んでいます。

表1 主に釧路市に関するタンチョウ保護の動き

1889 明治22	北海道庁丹頂狩猟禁止令
1892 明治25	保護鳥指定
1924 大正13	釧路湿原内で再発見
1935 昭和10	天然記念物「釧路のタンチョウとその生息地」指定
1950 昭和25	阿寒町で人工給餌成功
1952 昭和27	道の一斉調査で33羽が確認。特別天然記念物指定
1958 昭和33	釧路市丹頂鶴自然公園開設
1965 昭和40	阿寒町タンチョウ愛護会結成
1967 昭和42	特別天然記念物指定（地域を定めず）
1968 昭和43	鶴公園で人工繁殖に成功
1975 昭和50	釧路市動物園開園
1977 昭和52	阿寒町タンチョウ観察センター開館
1981 昭和56	阿寒町のタンチョウ飛来地域が鳥獣保護区指定
1982 昭和57	タンチョウ保護増殖センター開設
1993 平成5	絶滅の恐れのある希少野生動植物の種の保存に関する法律制定 国内希少野生動植物種指定（保護増殖事業計画の策定）
1996 平成8	阿寒国際ツルセンター開館
2011 平成23	ニトリ・サルルンカムイプロジェクト始動（2015年度まで）
2013 平成25	環境省タンチョウ生息地分散行動計画策定
2015 平成27	給餌場における給餌量調整開始
2023 令和5	環境省タンチョウ生息地分散行動計画改定
2024 令和6	環境省給餌場における高病原性鳥インフルエンザ対応指針策定

タンチョウの飼育の歴史

1958年に釧路市丹頂鶴自然公園（鶴公園）が開設され、人の関与の下でタンチョウを自然繁殖し、育った個体を野外に放鳥すること、および飼育繁殖に関する知見を集めることを目的としてタンチョウの飼育が始まりました。ここに野生から捕獲された5羽が放され、やがて野生から飛来した個体とペアが成立し、繁殖が始まったのです。1964年には初めて人工育雛に、また1968年に初めて人工繁殖に成功しました。そうして育てられたヒナの多くは野外に放鳥されました³⁾。1975年には釧路市動物園が開園、その後1982年に動物園内にタンチョウ保護増殖センターが開設され、タンチョウの飼育数も増えていきました。現在では、1996年に設立されたツルセンターも含めた3施設でタンチョウを飼育しています⁴⁾。

身体検査をしてみる

さて、飼育をしていますので、ちょっとタンチョウの体を詳しく見てみましょう。身長約140～150cm、体重は約6～10kg、翼を広げると240cm程度になります。なお科学的には【全長：^{くちばし}嘴の先から尾羽の先まで】を示すべきなのですが、今回はわかりやすさ重視で立ち姿とします。なお全長の場合は約120～140cmです。筆者が165cm程度ですので、成人男性より少し小さいと思えばよいかと。なお体重は比べてはいけません。鳥類の中ではかなり大型の部類で、そのため、飛び立つ際に数歩の助走が必要になります。体重は季節に伴って1～2kgの増減があり、秋から冬にかけて食い込み、春先から夏にかけて体重が減少します^{1)、5)}。人間はこんな簡単に体重が変化しませんのでうらやましい限りです。いや、簡単ではないのでしょうかけれど。

タンチョウは主に湿地などに生息します。背が高く、脚が長く、足の指も長いです。時々、「膝が逆に曲がっている」と聞かれることがありますが、タンチョウを含め、鳥類の膝は外からははっきりと見えません（写真5）。逆に曲がっているように見えている関節は実

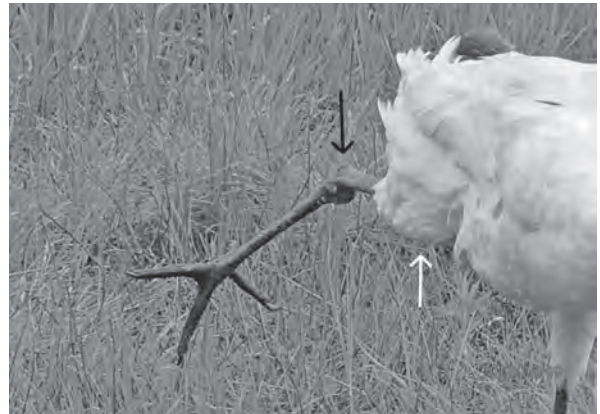


写真5 黒矢印が踵、白矢印が膝

は人間でいう踵^{かかと}で、鳥類では「ふ蹠^{しよ}」と呼び、タンチョウでは約30cmありますが、これは哺乳類でいう足首の骨と足の甲の骨が癒合した部分です。タンチョウに限らず、鳥類は基本的につま先立ちをしています。足の指も長く、足跡は直径約18cmになりますが、第1趾（人間でいう親指）が少し高い位置についているため、物が握れず、木の枝に止まることはできません。代わりに、長い脚と長い趾^{あしゆび}で体を支え、湿地など足元の悪いところでも自在に歩き回ることができます。

体の色や形には、雌雄で違いはありません。性別は飼育管理上重要なので、現在は血液などを採取し、DNA判別を依頼していますが、お金や時間、捕獲の必要性など課題もあります。オスの方が全体的に少し大きいため、計測値から雌雄はある程度判別できます^{6)、7)、8)}。ただぱっと見ではわかりませんし、数値にばらつきもあります。なので、残念ながら単独でいた場合は雌雄を見分けるのはまず不可能です。ペアが成立していれば、鳴き合いという特徴的な行動（オスが一声「コー」、メスが二声「カッカッ」と続けて鳴くことで、ペアで行われる鳴き方）があり、またその際オスは翼を少し持ち上げるので、声や行動から判別できます¹⁾（写真1はペア同士の張り合いで、右から2番目はオス）。

タンチョウの声は非常に大きく、広い縄張りによく響きます。タンチョウに限らず鳥類は大きな胸骨（い

わゆるヤゲン）を持ち、竜骨突起という部位に大きな胸筋、浅胸筋（いわゆる胸肉）と深胸筋（いわゆるささみ）が付きます。タンチョウの成鳥では合わせると約1 kg以上あります。タンチョウの気管は非常に長く、この竜骨突起の中に潜り込み、中でループしています（写真6）。鳴管から発せられた声は、この長い気管で金管楽器のように増幅され、大きな声となるのです。気管は成鳥では約110～130cmと長く、個体差はありますが、オスの方がメスより長いです⁹⁾。気管は成長に従って胸骨内に入り込んでいき、それに伴って声変わりをします。ヒナのうちはピイピイという甲高い声しか出なかったのが、1歳頃には少し落ち着いて、少しずつ親のような声に変わっていくのです¹⁰⁾。



写真6 胸骨内の気管走行

タンチョウの飼育と繁殖

さて、先述のとおり、タンチョウは3歳で成鳥となり、繁殖可能になります。雪が解けてきた3月中頃から繁殖期に入り、縄張りの中に枯草や枯れ枝などを集めて、直径約100～120cmの皿状の巣を作ります（写真7）。卵は一度に1～2卵で、有精卵なら約32日でヒ



写真7 タンチョウの巣



写真8 卵（左が1卵目）



写真9 暗箱内で光を当てる

ナがふ化します¹⁾（写真8）。1卵目と2卵目の大きさには差があり、おそらくヒナが1羽でも育つことを優先しているのでしょうか。2羽を育て上げるペアもいますが、冬に2羽連れで確認できる割合はヒナ連れのうち約15%で、2羽育て上げるのは大変な労力がかかると考えられます¹¹⁾。

卵は雌雄交代で抱くので、ペアで行動していたタンチョウが片方ずつ行動するようになったら産卵したことがわかります。確認後数日してから卵を一度回収して巣には擬卵を入れ、本物は大きさを測り、暗いところで光を当てて有精卵かどうかを調べ（写真9）、ふ卵器で保温して有精卵だった場合はふ化予定日の数日前に親元に戻します。過去には人工育雛、飼育を行っていましたが、現在は親に育ててもらう自然育雛を基本としています^{3)、4)}。

ヒナはだいたい体重100g程度、手のひらに乗るサイズで生まれてきますが（写真10）、すぐに大きくなり、生後約3か月で親くらいの身長になります。4か月程度で羽が生えそろい飛べるようになるので、その頃一度捕獲し、計測や採血、性別判定を行います。また飼育下に残す場合は風切羽^{かざきりばね}の一部を切る切羽を行い、ケージから飛び出せないようにします。過去には羽を切らず出入り自由に飼育していましたが、現在は事故の防止や鳥インフルエンザ防止などのため切羽しています。タンチョウの風切羽はだいたい2年に1回抜け落ち、1か月半程度かけて新しくなります^{12)、13)}。そのため、飼育個体は健康診断を兼ねて定期的に捕獲しています（写真11）。



写真10 ヒナ（生後約1週間）



写真11 体重測定

成長、そして個体群管理

タンチョウの飼育は最初に鶴公園に放された5羽と、鶴公園に飛び込みそれらとつがいになった野生個体から始まりました。ここに傷病保護されて野生に戻らなかった個体や、新たに飛び込んできた個体などが加わり、現在大きく3つの家系があります。生まれた個体は、当初は設立目的に従って主に放鳥されましたが、現在は飼育個体の世代交代や新たな血統を加えていくため、血統を確認しながら方針を決めています⁴⁾、¹⁴⁾。放鳥する場合は環境省指定の足環^わをつけ、残す個体は切羽して管理します。ヒナが大きくなり、2月頃には子別れが始まります。残す個体は捕獲して別のケージに分け、放鳥個体は、親が次の繁殖を始めるのでいずれ追い出されます。足環がついているので、目

撃情報があればどこに行ったか、何年生きたか、繁殖したかなどがわかってきます。1999年以降で33羽を放鳥していますが、そのうち約4割がペアを形成し、8ペアがヒナを育てたことがわかっています¹⁵⁾。このように、飼育個体の放鳥も野生個体群の維持に一部寄与しています。

一方でタンチョウは縄張りを強く意識するため、ある程度広い飼育スペースが必要で、ペアまたは単独でしか飼育できません。そのためブリーディングローン（繁殖貸与）という仕組みを利用し、複数の動物園で飼育を行っています。現在は釧路以外に旭山動物園、円山動物園、そして岡山後楽園で北海道産のタンチョウが暮らしています。また2011年に当園と台北市立動物園との間で学术交流の覚書が交わされ、また同年から2015年まで行われた株式会社ニトリホールディングスと釧路市、北海道の連携協定による「ニトリ・サルルンカムイ・プロジェクト」の一環として、台北市立動物園にもタンチョウ1ペアが貸与され¹⁶⁾、2022年にはヒナが誕生しています。タンチョウの域外保全是、このように多くの主体が関わって行われています。

さて、飼育の話で紙面が尽きましたので、次回は野外での状況を交えて紹介いたします。

引用文献

- 1) 正富宏之 2000 タンチョウ-そのすべて- 北海道新聞社
- 2) 環境庁・農林水産省・建設省 1993 タンチョウ保護増殖事業計画
- 3) 叢書編さん事務局 1976 タンチョウの釧路. 釧路市
- 4) 釧路市動物園 2015 開園40周年記念誌「あゆみ」 釧路市
- 5) 矢口 茜 2016 動物園研報1: 188-191.
- 6) Inoue M. et al. 2013. J. Vet. Med. Sci. 75: 1055-1060.
- 7) 村田浩一ほか 1988. 山階鳥研報20: 101-106
- 8) 吉野智生 2024 阿寒国際ソルセンター紀19: 3-6
- 9) 吉野智生 2025 阿寒国際ソルセンター紀20: 3-7
- 10) Klenova AV et al. 2007. Ornithol. Sci. 6: 107-119.
- 11) 正富宏之ほか 2017 阿寒国際ソルセンター紀14: 3-26
- 12) 吉野智生ほか 2018 阿寒国際ソルセンター紀15: 21-26
- 13) 正富欣之・正富宏之 2022 山階鳥学誌54: 274-279
- 14) 井上雅子 1999 動水誌40: 90-96
- 15) 松本文雄ほか 2014 ふれあい129: 4-5
- 16) ニトリ・サルルンカムイ・プロジェクト連携協定事業支援委員会 2020 ニトリ・サルルンカムイ・プロジェクトの歩み. 北海道環境局自然環境課